2030 アジェンダ・SDGs を自分事化するためのツールの開発

Development of a tool that facilitates self-inclusion within the 2030 Agenda for Sustainable Development and SDGs

村山史世*,　相場史寛**
MURAYAMA Fumiyo*,　AIBA Fumihiro**
*麻布大学 講師,　**麻布大学 2 年

［要約］ 国連が 2015 年に採択した「持続可能な開発のための 2030 アジェンダ(以下, 2030 アジェンダ)」は，国家のみならず，企業や NGO,市民などあらゆる主体がビジョンを共有・共創しながら実現するための行動計画である。2030 アジェンダの中核が「国連持続可能な開発目標(SDGs)」である。SDGs は，課題の相互関連性と，課題解決のために多様な主体が水平的に連携・協働するマルチステークホルダー・パートナーシップによるガバナンスを前提としている。

2030 アジェンダ・SDGs は，全世界的な最低限度の達成目標を示しているので，直接の関係性を見出しがたい地域や主体もある。しかし課題が相互に関連した構造を有することおよび課題解決のために多様な主体のマルチステークホルダー・パートナーシップが必要なことは共通かつ普遍的である。

そこで本研究は，市民や NPO,企業や自治体などが，それぞれの地域でそれぞれの課題を SDGs が示す課題の構造に倣って自分事化するためのツールを開発した。

［キーワード］2030 アジェンダ，SDGs，自分事化，ビジョンの共有・共創，ガバナンス

１．はじめに

2030 アジェンダは,グローバル・ガバナンスにおけるあらゆる主体の 2016 年から 2030 年までの行動計画として，2015 年 9 月の国連総会で採択された。それは，すべての人・主体・地域・国の共通原則としての「普遍性」，人権を尊重し誰一人として取り残さない「包摂性」，開発と経済・社会・環境を統合的に扱う「統合性」などの特色がある。2030 アジェンダの中核は，17 のゴールと 169 のターゲットで構成される SDGs である。

しかし，SDGs のゴールとターゲットは，全世界で達成すべき最低基準すなわちワールド･ミニマムであるため,網羅的で数も多い。またもう既にいくつかのゴールやターゲットを達成している国や地域では，当事者性をもって自らの問題と 2030 アジェンダ・SDGs を関連づけること，つまり自分事化が難しい。

そこで本研究は，市民や NPO,企業や自治体などが，それぞれの地域でそれぞれの課題を SDGs が示す課題の構造に倣って自分事化するためのツールを開発した。

２．2030 アジェンダの構造

2030 アジェンダ･SDGs を自分事化するには，まずその構造を理解しなければならない。

第一に，2030 アジェンダは，国連で合意された全世界的なアジェンダである。アジェンダとは，政府や行政のような公的セクターのみならず，営利・非営利の多様な主体の参画と合意で将来ビジョンを共有し，そのビジョンに基づいて価値を共創するために，各主体の責任と役割を明記し，連携と協働で実施さ

れる行動計画である。それは，多様な主体が他の主体と連携・協働しながら主体的に共有ビジョンを共創するための規範でもある。

2030 アジェンダはグローバルな空間を前提に構想された。そこでは世界政府が存在せず，多様な国家，企業，NGO,市民，国際機関などが連携と協働で公共的な役割を担うグローバル・ガバナンスが行われる。他方，2030 アジェンダを具体化する地域や地方自治体では，わが国の場合，地方分権改革以降は営利・営利の民間セクターが公共セクターと連携・協働しながら公的な役割を担うローカル・ガバナンスが行われている。(村山･滝口 2018)

第二に，2030 アジェンダは，課題は相互に関連しているとの見方に基づいている。例えば，ある地域の貧困は経済的な課題のみならず，ジェンダー格差や衛生，教育や労働など，多様な課題が相互に関連し合う複雑な構造となっている。

SDGs のゴールは，目標であると同時に達成すべき世界の主要な課題であり，それらはアイコンで表象されている。17 のゴールの相互関連性のあり方は，地域ごと主体ごとに多様である。ターゲットも同様である。

第三に，2030 アジェンダは，課題解決手法としてマルチステークホルダー・パートナーシップを採用している。グローバル・ガバナンスおよびローカル･ガバナンスにおいては，法的拘束力がないアジェンダが規範となり，ビジョンを共有・共創する多様な主体による参画を前提とした連携・協働こそが，課題解決の手法となる。強制力を伴う法律で市民・企業に対して垂直的な統治を行う国家とは対照的である[1]。

このように，2030 アジェンダ･SDGs は①ビジョンを共有・共創する多様な主体の行動計画，②課題が相互に関連する構造，そして③課題解決の手法として多様な主体の連携・協働を重視，との特色がある。

ところで，SDGs ゴールもターゲットも既に達成している国や地域も存在するかもしれない。そこに住む人たちにとって 2030 アジェンダ・SDGs は他人事なのであろうか？

確かに，課題は地域ごと主体ごとで多様であり，ゴールやターゲットの達成度にもばらつきがある。しかしある主体にとって現在は課題でないことが将来課題となる可能性はある。課題から永遠に解放される主体は存在しない。この意味で 2030 アジェンダ・SDGs が示す課題と無関係な主体は存在せず，他人事ではいられない。そして，現在それぞれが直面する課題は多様であっても，課題の相互関連性の構造自体は共通であり，普遍的である。

３．SDGs おでん

課題は多様でもその構造は共通かつ普遍的であるとしたら，各人がそれぞれの課題の構造に気づくことが重要である。そこで，SDGs のアイコンを活用して自らの課題の構造を可視化し，ビジョンにつなげ，それぞれのアジェンダを構想するワークシートを開発した。

このワークシートは，麻布大学環境科学科選択科目「環境フィールドスタディ」で「SDGs と自分自身をつなげるプロジェクト」を実施した相場と指導教員の村山で共同開発した。

まず 17 のゴールのアイコンに着目した。ゴールはターゲットに比べて抽象度が高いため，より不特定多数の主体に関連づけられる。

図１　SDGs の 17 のゴールのアイコン

アイコンを再配置して経済・社会・環境の統合性の観点から SDGs の構造をウエディングケーキで表現したものとして，Stockholm Resilience Centre のイラストがある。

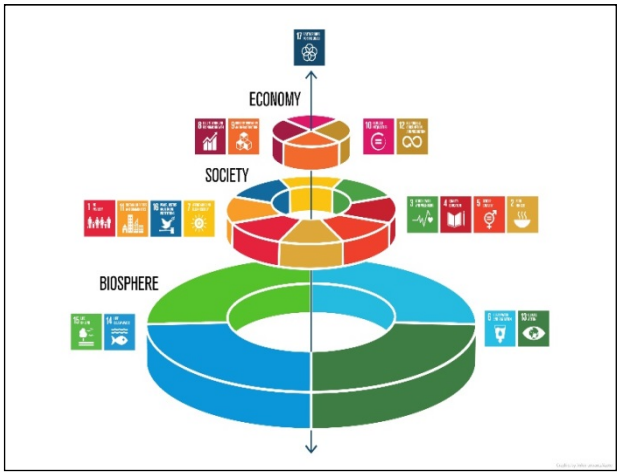

図 2　Azote Images for Stockholm Resilience Centre

このイラストは SDGs の理解を目的としており，SDGs と自己をつなげることを意図していないが，アイコンの活用手法は参考となる。

また時間軸を意識して自らと社会をつなげる山田(2008)のワークシートも参考となる。

これらを参考に，アイコンを活用して自らの課題の相互関連性を可視化し，自らのアジェンダとビジョンを構築して自分事化する「SDGs おでん[2]」のワークシートを開発した。

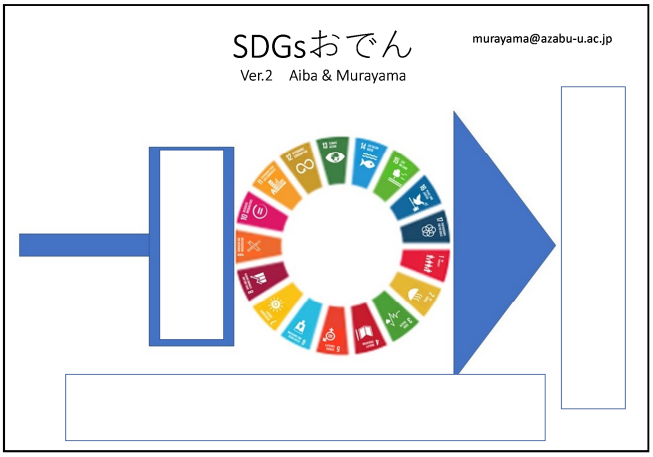

図 3　SDGs おでん

手順は以下のとおりである。

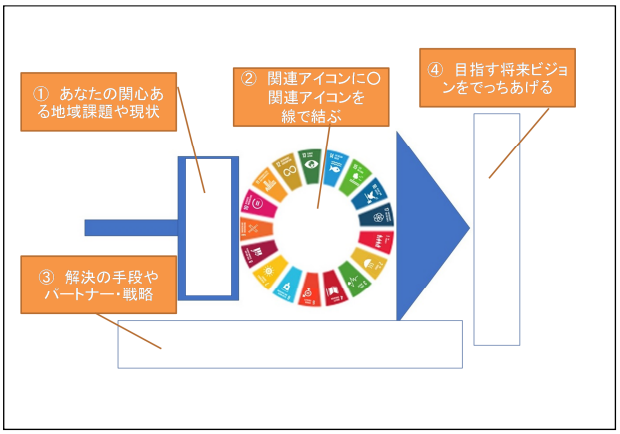

図 4　SDGs おでんの手順

① 左端のおでん種に「あなたの関心ある課題や現状」を書き込む。
② 真ん中のおでん種には円状に SDGs のゴールのアイコンが配置されている。このうち①の「関心ある課題や現状」に関連する複数のアイコンに○をつける。○をつけたアイコンで関連性があるものを線で結び，関係性を可視化する。
③ 下の皿に，「課題解決のための手段やパートナー，戦略」を書く。
④ 右端に「目指す将来ビジョン」をでっちあげる。

目指す将来ビジョンは，一時的にでっちあげても構わない。ビジョンは，状況に応じて立ち現れる生成的なものであり，時間・場所・環境に応じて変化する。だからこそビジョンは，絶え間ない問い直しと検証が必要である。このように，ビジョンは変化するものであるが，後で検証できるようにその時々のビジョンを書き留めることは重要である。

また，この個人のビジョンは，他者や他の主体との対話によって共有ビジョンを構築するときにも，活動・行動を通じて自らの，および他の主体と共有・共創しているビジョンを書き直す時にも有用である[3]。

４．SDGs おでんの試行

SDGs おでんのワークシートは，2017 年 11 月 22 日に実施したユニコムプラザさがみはら（相模原市立 市民・大学交流センター）主催市民・大学交流会「SDGs(国連持続可能な開発目標)の多様な入り口」のワークショップで試行した。そこでの参加者の意見を参考にして改良したワークシートは，12 月 2 日の神田外語大学イノベーティブ・クラスルーム・プラクティスでのワークショップ「多様な主体と関わりながら SDGs を理解する学習機会のデザイン」および 12 月 8 日の武蔵野大学主催エコプロ 2017 併設セミナー「SDGs を活用して市民・企業・自治体で課題解決」，そして 2018 年 1 月 13 日のシビックテックもばら主催の「SDGs2030 勉強会」で試行してみたり，プレゼンテーションしたりしながら，参加者の意見をいただいた。

SDGs おでんのワークシートの利用を希望する者にはデータを提供した。実際に，神田外語大学でのワークショップでワークシートを体験した大重史朗氏は，その後氏が担当する東京都市大学環境学部環境創生学科とメディア情報学部社会メディア学科 1 年生の選択科目「キャリアデザイン基礎」で SDGs おでんのワークシートを活用していただいた[4]。

５．おわりに

SDGs おでんのワークシートは，あくまでも 2030 アジェンダ･SDGs を自分事化するためのツールであり，SDGs 自体の理解や，SDGs を活用した自らの活動の整理や他の主体との協働のツールとしてはデザインしていない。

しかし，他のワークシートやツールと組み合わせたワークショップを企画すれば，様々な展開が可能であるに違いない。

今後は，このようなワークショップを試行しつつ，SDGs おでんを改善してゆきたい。

謝辞

本稿は，未来の学びと持続可能な発展・開発研究会（みがく SD 研）での討論に多くを負っている。特に石井雅章（神田外語大学），畑正夫（兵庫県立大学），田中優（大阪国際大学），村松陸雄（武蔵野大学），勝浦信幸（城西大学），陣内雄次（宇都宮大学），滝口直樹（合同会社環境活動支援工房），長岡素彦（一般社団法人地域連携プラットフォーム），そして高橋朝美（一般社団法人環境パートナーシップ会議）の諸氏に感謝する。

引用文献・参考文献

Stockholm Resilience Centre, Stockholm University(1996) http://www.stockholmresilience.org/research/research-news/2016-06-14-how-food-connects-all-the-sdgs.html (2018 年 2 月 5 日アクセス)

村山史世・滝口直樹，2018，「自治体・地域づくりから見た 2030 アジェンダ・SDGs の可能性についての予備的考察」『武蔵野大学環境研究所紀要』 7: 73-88

村山史世，2017，「ESD の教材としての自治体計画と 2030 アジェンダ・SDGs−地域課題を取り扱う主体的な学びのために−」『日本環境教育学会関東支部年報』11: 29-34

山田ズーニー，2008，『考えるシート』講談社，東京

---

[1] 近年は国家でも連携・協働は重視されつつある。

[2] おでんをモデルにワークシートをデザインしたのは，串とコンニャクがビジョンへの方向性を示していること，日本人にとって親しみやすい食品であること，また楽しそうなことなどが理由である。

[3] ビジョンの共有・共創とは，このような絶え間ない生成的検証プロセスの結果としてできあがる。出来上がったものを，多様な主体のビジョンとすることも別にかまわない。しかしビジョンは，制度的に当事者を拘束する硬直的なものでは決してない。

[4] 希望者には SDGs おでんのワークシートは提供したい。希望者は，murayama@azabu-u.ac.jp（村山）までお問い合わせください。